

火星



四大抄

山尾玉藻

はつ秋の女出で来し芭蕉林

松の根の秋の鶉籠でありにけり

大釜の湯氣にのりたる草の絮

背の高き人を花野に待たせたる

秋晴のおどろきやすき神の鶏

こちらから声かけやうか花芒

めんどりとをんどりのみて水澄めり

人数分あり空つぽの茸籠

信心の背中の中の広し夕もみぢ

円卓の知らぬ同士に色鳥来

火星作品 山尾玉藻選

鉾立ての濟みし京へ水逸る
八幡吉田島江
滝音に茶屋の提灯やつれぬし
ゆつくりと山の暮れゆく土用の芽
倒れ木のそのまま橋に揚羽蝶
形代に淀の川風重たかり
木の花を螢火ひとつ越えにけり
神戸深澤鱧
白服の天城隧道出できたる
洗鯉より箸つけて雲ヶ畑
こちら見てゐる鮎宿の向かひかな
鉾立の舟のかたちの半ばなり
夕立に会ひたる髪を拭いてやる
明石戸栗末廣
違ふこと考へてゐる夏炉かな
花合飲や廻つてきたる昼の酒

水清く山椒魚を見失ふ
蛭籠掛けある宿に遅れ着く
山棟蛇喪明けを告げに來たりけり
祭鱧一直線の歸船かな
光影の芯濡らしをり百日紅
大川の萍に空あるばかり
込み合へる一つ葉に月生れにけり
夏萩や紙の音する風の出て
片陰より神父大きく現はるる
毛虫取るための割箸わりにけり
紫陽花や火星接近しつつあり
大川に花火のしづく降り積もる
鬼灯にはじめ揉まれてゐるやうな
潮焼けの声にががんぼ近くゐる
出水川橋のなかばに薄日さす
手のキブス柱にこつんと秋の風
先程の猫とまた会ふ花糸瓜

姫路松たかし

神戸元田千重

箕面浜口高子

選のあとに

山尾 玉藻

今月はいつになく低調であった。俳句は短い所為かすぐには自己採点が辛い。また、手持ちの作品がそれなりに出来ていると思ひ勝ちである。自己採点が解らない分、甘くなり勝ちであるとも言える。自分の経験から言つて低調の理由は唯ひとつ、作句に関わる時間が少なかったからである。数字には表れないものの、はつきり結果が出てくるのが俳句なのである。また選者としては、火星作品の他、恒星圏、獅子座からの抽出句が同じ作家に重ならないよう満遍なく採りたいたのであるが、往々にして重なるのが現状である。この事からも、作句に充分な時間を費やした作家が極端に少なかったと言える。折角「一相一味」「朝座夕座」で外部の先生方の選を仰いでいる事でもあり、抜かりなく頑張つて頂きたい。

白服の 天城 隧道 出で きたる 深澤 鱧

この句を鑑賞する上で「天城隧道」と言う固有名詞について考えてみたい。これまでにも俳句の省略は共通体験に拠るものであると言つてきたが、この句の「天城隧道」は川端康成の『伊豆の踊子』の共通知識を踏まえたものである。『伊豆

の踊子』を知らない者にとっては鑑賞が浅くなる筈である。虚子の句に「青木に影といふものありにけり」があるが、これも『源氏物語』などの古典を踏まえているものである。これに関わる事で、山本健吉が『現代俳句』の中で子規と虚子の俳句観の違いを明快に述べている文章があるので引用する。〈虚子が子規と道灌山の茶店で休んでいたとき、夕暮になつてきて茶店の下の崖には夕顔の花が白々と咲き始めた。そのとき子規は、夕顔の花の句は、いま親しくこの花を見ていると、以前の空想的な感じは全く消え去つて、新しい写生的の趣味が頭を支配するようになった。虚子はこの子規の気持ちをよく了解しながらも、この説に不満であった。虚子によれば、空想趣味とは「古人が一握りずつの土を運んで築き上げてくれた趣味の上にさらに一握りの土を加えようとするところのもの」なのである〉

掲句を鑑賞する上でも大いに納得出来る文章である。但し子規の立場とすれば、当時流行した月並み俳句を排する事などの俳句改革を奨める上で、今までのものを全て捨て去ると言う極端な方法を探らざるを得なかったのも確かである。

滝音に 茶屋の 提灯 やつれぬし 吉田 島江

滝見茶屋が在る所は自ずと昼なお暗い所であり、「提灯」には灯が入っている。この句の手柄は下五「やつれぬし」と擬

人法的に使った所にある。作者は「瀧」そのものも生き物と見立てたのかも知れない。一見して情景が鮮明に見えてくる。

大川の萍に空あるばかり 松 たかし

この句の「大川」は大阪の大川のような固有名詞ではなく、ただ大きな川というだけであろう。この単純さが掲句では良い働きをしている。平原の中を流れる川が浮かんできくる。作者はそこで点描として「萍」だけに焦点を当てた。「空あるばかり」はこなれた表現。炎天下の午後の景色である。

蚊遣してうからはらから生きて会ふ 丸山 照子

今この「選のあとに」を書いているのは盆の十三日、おそらく掲句も盆の日の実景であろう。「生きて会ふ」の措辞に、それぞれ年老いながらも健康で出会えたと言う思いがある。「生きて会ふ」には生活の素朴さと平凡さが読み取れ、実感として伝わってくる。

雲ヶ畑の雲居に抜きぬ鮎の骨 河崎 尚子

「雲居」は雲、山霧のことであるが、明るさと高さの点に於いて「雲居」の語の方が勝っている。固有名詞を充分に活かした作品である。

つままれて空歩きする兜虫 大石 芳三

ちよつとした写生句である。多くの観念句を見ているとついついこう言う句に惹かれる。この句の「つままれる」ものは天牛でもザリガニでも良さそうだが、やはり「兜虫」が良い。「兜虫」の艶やかで正確そうな楕円形が脚の動きを鮮やかに見せてくれる。「空歩き」は常体でない時の足掻きである。

人混みの団扇の風をもらひけり 中島きよ系

「人混み」には駅のホームや信号待ち等もあるが、その場合は「団扇」でなく扇子であろう。「団扇」の場合は祭か花火見物が似合いそうである。「もらひけり」とは言ったものの、快い風ではなく蒸し暑い風であろう。「人混み」と設定することで非凡な佳句となった。

揚花火下駄をつかめる足の指 元濱 靖子

「足の指」に焦点を絞ったところが良い。「揚花火」と言う美しいものを見た感動が興奮に変って行くのである。「つかめる」の措辞が的確である。(以下略)

差知子俳句鑑賞

晩秋の海へ両手は垂れて歩む 差知子

〔岡本差知子句集〕より 昭和十四年作

芦屋の南の方に暫く住まれたと伺った。母上はこの翌年に永眠された。東の間の満ち足りた静かな日々。先生の自画像。此の句に並んで〈秋ふかし足跡ながくしてひとつ〉がある。

（千枝子）

玉藻俳句鑑賞

両の掌の桃のかたちには桃受くる 玉藻

〔火星〕平成十四年十一月号より

桃の実は、果汁が多く皮が薄いので取り扱いに気を遣う。強く掴んだりしたなら、そこから即変色する。そっと掌にのせて貰う。「桃のかたち」受くるに大切さが滲み出てまた桃をリフレインさせた処も素晴らし。

（春月）

恒星圈

小池 楨女

釣人の高さに揺るる青芒
七夕や信号を待つ子等の列
今朝の秋鈴附けし猫通りけり
高庄の線に寄りぬし渡鳥
花木榿話す言葉に齡あり

金澤 明子

小林 あつ子

涼やかに点滴いのち滴らす
半夏生罪無く睡る小半日
五分粥を噛み白雲を膨らます
白南風や朝の茶配るナースの手
七月のナース水のいろ花のいろ

老鶯や遠くの海を思ひをり
一つ葉にかがみ一人を樂しみぬ
新松子並びて振りし神の鈴
終点が始点となりし青岬
海風のあとの波音レース編む

木野本加寿江

嵯峨 根鈴子

青ほほづき夜遊びの猫戻りくる
八月や鉄路に降りし大鴉
時の日の時をとどむる湖の色
開けるなりすべり落ちきし藺座布団
棕櫚竹の根本に茶殻夕焼す

くるぶしを吹く梅花藻の花の風
はたた神犬のふぐりを撫でゆけり
あかときの畳に浮輪ふくらまし
手を添へて簾の風を遣りにけり
帚木に隠りて男泣きにけり

獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

夏の灯のはや点しあり雲ヶ畑
雨音に瀬音かむさる夏料理
髪かくも濡れあぢさゐに別れけり
涼しさや青田を神の鶏のこゑ

戸栗末廣

堀 義志郎

眈に奢りありけりかんかん帽
白南風の船に乗り込むチンドン屋
跳ねし音して蓮葉の翻る
ひと握りほどの水着の雫なり

大東由美子

目を立てて走るは速し蟹の恋
凌霄の再度の盛り筆を干す
静かさや笠置の大き蝸牛
烏瓜の花の目覚めとなりけり

城尾 たか子

石叩自問自答の時なりし
爪切草人材派遣会社前
砂風呂の音のしてゐる夏の月
仙人と見ゆる男の御来迎

山田美恵子

花火の夜肩のあたりが軽くなり
桃の実に威しのカラス揺れてをり
花火の夜固まり来たる背広かな
ひとり来て滝壺ばかり見てをりぬ

土屋 醉月

いつまでも岩魚に降りし細き雨
調理場を吹き抜けてきし滝の風
雲の峰鳥賊釣舟は無くなる
昼寝子のプールのにほふ頭かな

誰も皆くぐりし茅の輪振り返る
ひんやりと畳はありて梅雨の月
炎天を貼りつけてゐし潦
初茄子息ととのへて剪りにけり